

C. キャリア支援①

本分科会では、教員、職員（キャリア・ボランティア・カウンセラー等）、障害学生支援担当者により、障害のある学生の就職活動の支援や外部との連携、社会を見据えた修学支援のあり方について議論を行った。主な話題は以下のとおり。

1. 重度身体障害学生について

家族にも教職員にも困りごとを話さないケースがある。「自分の気持ちを表に出す練習を行う」「ヘルパーからの声をひろう」等、皆で協力していくことが重要である。障害の種別に関わらず「障害を理由にしない」学生や、明るく積極的で約束を守るといような学生が就職に繋がっている傾向がある。成功した先輩から、「障害があるという強みを活かしたエントリーシートの書き方」を伝授してもらい機会をつくる、障害のある学生向けのセミナーを紹介する等、「人と繋ぐ」ことも支援担当者にとって重要な役割だと考えられた。

2. 発達・精神障害学生について

支援室等が関わっている居場所、ランチミーティング、ワークショップ、キャンプ等を活用し、「大人の目の届く所で学生同士が関わる機会」を活かし、小さな成功体験を積み上げていってもらうこと、それらの交流の中で、以前悩んでいた学生が、現在悩みの最中にいる学生を、学生だからこそできる絶妙な距離感でサポートし、双方にとって効果的な構図ができることが紹介・共有された。学生相談室等の専門機関を紹介しても、自分は対象外と考えて相談に行かないケースも少なくないが、その学生達にとっても上記のようなピ

アサポート的な交流が役立つと考えられた。

3. 資格取得を目指す場合について

入学前に相談がないケースもあるが、①早い段階で、資格が取れない可能性や実習を受け入れてもらえない可能性を説明し、納得した上で入学・コース選択してもらうこと、②障害があるためにできないと断定するのではなく、仕事というものはチームで行う「分業」であることを本人や就職希望先に理解してもらうこと、③適材適所を活かしていくことが重要だと考えられた。学内でのプレインターンシップ、学外の NPO や社会福祉協議会、発達障害の自己理解プログラムを活用し、できれば「顔がわかる支援」が行えればより良いと考えられた。

4. すべてに共通して

各学校の規模や専門性、修学年数（短期大学か大学か等）を活かしたサポートが大切である。経験自体が少ない学生が多いため、経験すること自体が非常に有意義で豊かな体験となり、共に参加した教職員にとっても役立つことが考えられた。

どの段階で、障害者枠での就職情報を提供するかは難しい問題であるが、他部署との情報共有が困難なため障害者枠の就職情報を活かしていきれていない状況が課題と考えられた。

以上